

秋の田の かりほの庵の 苫をあらみ
わが衣手は 露にぬれつつ

春過ぎて 夏来にけらし 白妙の

衣干すてふ 天の香具山

あしびきの 山鳥の尾の しだり尾の
ながながし夜を ひとりかも寝む

奥山に もみぢ踏み分け 鳴く鹿の
声聞く時ぞ 秋は悲しき

天の原 ふりさけ見れば 春日なる
三笠の山に 出でし月かも

わが庵は 都の辰巳 しかぞ住む
世をうち山と 人はいふなり

花の色は 移りにけりな
いたづらに
わが身世にふる な
がめせしまに

これやこの 行くも
帰るも 別れては
知るも 知らぬも
逢坂の関

天つ風 雲の通ひ路
吹き閉ぢよ
乙女の姿 しばしと
どめむ

筑波嶺の 峰より落つる 男女川
恋ぞ積もりて 淵となりぬる

陸奥の しのぶもぢずり 誰ゆゑに
乱れそめにし われならなくに

君がため 春の野に出でて 若菜摘む
わが衣手に 雪は降りつつ

立ち別れ いなばの山の 峰に生ふる
まつとし聞かば 今歸り来む

ちはやぶる 神代も聞かず 竜田川
からくれなゐに 水くくるとは

住の江の 岸に寄る波 よるさへや
夢の通ひ路 人目よくらむ

わびぬれば 今はたおなじ 難波なる

みをつくしても 逢はむとぞ思ふ

小倉山 峰のもみぢ葉 心あらば

今ひとたびの みゆき待たなむ

みかの原 わきて流るる 泉川

いつ見きとてか 恋しかるらむ

山里は 冬ぞ寂しさ まさりける

人目も草も かれぬと思へば

心あてに 折らばや折らん 初霜の

置きまどはせる 白菊の花

有明の つれなく見えし 別れより

暁ばかり 憂きものはなし

朝ぼらけ 有明の月と 見るまでに
吉野の里に 降れる白雪

山川に 風のかけたる しらがみは
流れもあへぬ 紅葉なりけり

ひさかたの 光のどけき 春の日に
静心なく 花の散るらむ

誰をかも 知る人にせむ 高砂の

松も昔の 友ならなくに

人はいさ 心も知らず ふるさとは

花ぞ昔の 香に匂ひける

夏の夜は まだ宵ながら 明けぬるを

雲のいづこに 月宿るらむ

白露に 風の吹きしく 秋の野は

つらぬきとめぬ 玉ぞ散りける

忘らるる 身をば思はず 誓ひてし

人の命の 惜しくもあるかな

浅茅生の 小野の篠原 しのぶれど

あまりてなごか 人の恋しき